美少年虫

萩原葉子

少年虫

秋原葉子

筑摩書房

美少年虫

一九九三年三月二十五日　初版第一刷発行

著　者　萩原葉子
発行者　関根栄郷
発行所　株式会社筑摩書房
東京都台東区蔵前二―六―四
郵便番号　一一一
振替　東京六―四一二三
明和印刷／矢嶋製本

© YOKO HAGIWARA 1993
ISBN 4-480-81327-6 C0095

ご注文・お問合せ、乱丁・落丁本の交換は左記へ
大宮市櫛引町二―六〇四　郵便番号三三一
筑摩書房サービスセンター　電話〇四八―六五一―〇〇五三

目次

I

毎日が輝く　5
蝶になる　9
美少年虫人形　12
夜桜と夜鷹　15
出発に年齢はない　19
H店と私　22
虫との出合い　31
或る経験　34
長靴を履く　37
整理　41
大工と猫　44
星の流れに　48
テレビと取材　51

主婦のころ　53
困ること　57
倹約とは何か　59
私とコールドビーフ　61
一石二鳥の洋服縫い　63
書画のこと　66
金木犀の花　69
庭の植物と猫達　71
更に遅い出発　74
セロリ　77
カメン　79
突然変異　81

II

往復の悩み　85
八つ当たり　87

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

観点を変える　93
都会の若者達　95
マリリン・モンロー　98
親子げんか　100
男の家事　103
アルフレッド・ノーベルのこと　105
ロボットのこと　109
テレビに思う　111
日舞と和服　114
パーティ嫌いのパーティ　118
気楽な時代　121
駅のホームとパフォーマンス　124
女の立ち話　127
時代と学校　130
老人は乗るなのバス　133
よく分らないこと　136

サーカス　139
縋りたい若者　141
マネキン人形のウエスト　144
愛とは　147

III

私の五点　153
好きに生きた女性　158
思い出すこと　162
悪質商法を黙認したくない　166
私の一点　168
太宰治のこと　169
黒いマントの美しい人　173
那須の別荘開き　179
浦島太郎もどき……　183
父の書斎　186

寺山修司と息子のこと　194
『天上の花』のこと　197
最高にうれしいこと　200
榊山潤先生の思い出　203
アリス　206

IV

『コーラスライン』を観て　211
ドガの「バレエの舞台稽古」に思う　215
『カルメン』を踊る男　218
アントニオ・ガデスのこと　221
「トロカデロ・デ・モンテカルロバレエ団」のこと　223
『おはん』　227
マリア先生との約束　231
カラコレの少年　234
虫の虞と二度目の個展　237

カバー「私の足よ虫」

扉　「美少年虫」

本文中扉四点

すべて萩原葉子作品（撮影　中尾務）

美少年虫

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

I

毎日が輝く

私は何故か画廊に行くのが苦手である。演劇やダンスを見る時とは違う、自分でも分らない緊張感が湧く。

舞台から離れた客席で気軽に見るのでなく、主役と観客が接近しているためか。画廊はどこか気取って、取りすましているもので、入りにくい。身体を固くして、眼は作品から離さなくても上の空で、良い絵画か、つまらない作品かの判断もつかず、息をつめようやく一周した頃、背後から「いかがでしたか」の声がかかり、私の行動を見られていたことが分る。主役のぐるりには偉そうな評論家や有名な画家やカメラマン達がいて、私のような場違いな人を見向きもしない。

みじめな落ちぶれた気持で、この敗北感は何だろうと考える。ずっと昔になるが「見送る人々」を始め、サーカスやピエロを特に愛し描いた青森出身の画家・故阿部合成氏の個展が開かれ、銀座の画廊へ行った。同人雑誌の集まりでよく会い、画家の悩みなども聞かされ、気心が分

っているはずなのに、入口で芳名帳に署名する時、手がふるえ自分の名前を間違うほどあがった。
画廊の片隅に合成さんは赤い洋服を着た女子美大卒の若い由利子夫人と一緒に、大きな身体を恥ずかしそうにてれていた。主役のてれるのを見て、私は少しずつ落ち着きを取り戻したのを、覚えている。
画廊は苦手であると私は長年思い続け、出来れば行きたくない思いだった。それが、皮肉にも私が相手に嫌な思いをさせる側になってしまったのだ。第一回の個展を開くことになったからだった。長年の画廊コンプレックスの仕返しのためでも、敗北感の解答を出すためでもなかった。
小説書きの私が個展を開くと言っても、何のことか分らないので、案内状に作品を大きめに出した。いまは雑誌等で写真を見た人には分ってもらえるが、当時はまだ初めてだった。画廊の案内につきものの評論家や有名人の推薦文は、緊張感に拍車をかけるので止め、興味を持って来てもらえるよう、明るいものにした。講堂を借りてマンドリンの生演奏や、十八番のデュエットダンスを披露し、新刊三冊のサイン会も行い、「書いて、作って、踊る」の第一回だった。初日、三百人の大入りで、駒場の日本近代文学館始まって以来と言う入りだった。予期しない盛会で、反響も来て、思わない仕事が広がったのもうれしい。特に東京新聞の連載エッセイに私のデッサンの絵をつけ、肩書に「作家・絵も」と、入る仕事が来た時は、うれしかった。
私の小説は暗いことで、現代の明るく恵まれている時代には、受け入れられにくいと言われる

が、不思議にオブジェの作品は、どれも明るくユーモアがあり、分りやすく大衆に好かれる。丁度、戦争と言う救いのない疵跡を清純な娘に残した『置き去りにされたマリア』を書きながら、気分転換も兼ねて作っていたためか、まったく違った次元の作品が生れたのだった。

一つだけホンダワラを髪の毛に見立てて作った、一メートル余りの「撃つ」が小説の主人公をイメージした暗い人形だったが、あとは猫が主役で、猫のワッペンや紙ネンドの等身大猫を始め、ヒトデ、松ボックリ、貝殻等が脇役であった。

私は美大を出たわけでもなく、人形学校に学んだこともなく、まったく突然、独自の発想で作り始めたのが、家の中にたくさんたまったのだ。もちろん、はじめは人前に晒すつもりなど、毛頭なかった。あるきっかけで猫のワッペンを作り始め、嫌いだった縫うことが好きになり、友人達に面白いと賞められた。十センチほどのフェルトやスエードを土台に、ビーズやスパンコールで眼やヒゲをつけ、二つと同じものを作らなかった。アイデアはつきないが、高さと裏側の無いことが私の不満だった。折良く人形工房へ取材の帰り、一握りのネンドを持ち帰ったのが、第二の発想となり、高さと裏側のある立体を作るきっかけとなった。デッサンの土台がない私は、ネンドをもて余し、ドロドロになって格闘したが、挫けずに突き進み乗り越えられた時は、うれしかった。大磯の海から友人が拾って送ってくれる荒布、ホンダワラ、流木等が宅急便で来た時は欣喜雀躍し、私の人生を変えた。近年は虫に凝って、流木に毛皮をつけた「毛皮虫」や、スパン

コールやビーズなどで飾った「おしゃれ虫」を作った。沢山たまったので第二回めの個展を開きたいと思っている。むろん、ダンスつきで、新刊本のサインもする予定なので、「書いて、作って、踊る」の一人三役の準備に忙しく輝いている毎日である。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c